

# 「大震災から学ぶ介護現場の実態」

～緊急時避難準備区域での1介護福祉士の活動から～

平成 23 年 5 月  
福島県介護福祉士会会長  
深作 嘉代

忘れもしない3月11日の大地震は、多くの人が天災によって自分も死ぬということ意識させられた、恐怖の体験であった。

その渦中、すでにこの大地震は、私達が思いもよらない福島第一原子力発電所の事故を引き起こしていたのだった。日が経つにつれて、大きく変貌していく「東日本大震災」は、これでもかと言うほど福島県民を苦しめている。

私達が受けた脅威は、地震・津波・原発事故による放射能・風評と言われる。この中に人災が2つある。報道のあり方も脅威である。

誰一人として体験した事のない様々な事態に、明確な解答を出せる者はなく一方的に流れる無残な報道に、食ってかかるエネルギーも失い、憂鬱を絵に描いたような日々を過ごしているのが福島の現状である。

3月11日、大震災が起きたあの日から長い空白の時期を過ごした。1ヶ月半が過ぎようとしていた頃、福島のローカル紙に4、5行の小さな記事に胸が詰まった。

「福島原発がある太平洋岸に、手をつけることの出来ない、遺体が数百から千体ある」こんな無残な事態を、目に留まらないような数行の文字が報じていた。この新聞記事は、滅多に見ることのない文字でいっぱいだった。

「福島原発」「遺体」「千体」などだった。この現実に対して「申し訳ない」「ごめんね」と、口を突いて出た言葉は意味をなさなかった。

何も出来ない決め付けている何もしない自分と、はじめて向き合おうと思った。

大震災をみまった地球規模の自然の営みに、うらみの言葉は見つからなかったが、福島県のあったかい自然を、以前にも増して「大好きだ」と思ったのは確かだった。福島はこのまま、無味乾燥の「フクシマ」になってしまうのだろうか。

「東日本大震災」がもたらした未曾有の被害の中でも、岩手県、宮城県の状況とは一線を画す、特出した苦悩を持っている福島県の一員として、介護福祉士の一人として、起きた事の一つでも記憶に残したいと思い記録することとした。

この記録は、特に誰に対してでもなく、特に誰を責めるものでもなく、特に誰を賛美するものでもなく、こんな悲しみの現実があったことを心にとめておくためのものである。

福島県は東西に広がる県である。同じ時期でも、方部によって気温や風景は全く違ってくる。

福島県介護福祉士会が発足当時から、集合しやすい活動のために分けた6方部は、以下の通りである。

1. 県北方部…福島市を中心とした県の北部
2. 会津方部…会津若松市を中心とした県の西部
3. 県中方部…郡山市を中心とした県の中心部
4. 県南方部…白河市を中心とした県の南部
5. いわき方部…いわき市を中心とした太平洋に面した南方部
6. 相双方部…南相馬市を中心とした太平洋に面した北方部

太平洋に面し、福島第一原子力発電所を有した、5. いわき方部、6. 相双（そうそう）方部は、津波による原発事故被害を受けた最初の地域である。

後に放射能の被害は全県に広がる事となる。

福島県には、世界にたった1箇所、市内を4つに区分する状況の“市”が、存在する。

その4区分とは、

- ① 警戒区域（原発から20kmの立ち入り禁止区域）
- ② 計画的避難区域（おおむね1ヶ月をめぐりに域外に避難）
- ③ 緊急時避難準備区域（原発から20kmから30kmの緊急時・屋内退避または避難対応）
- ④ その他の区域

この区域とは、原発事故のため住民からふるさとを奪い、避難所での生活を余儀なくする基準に沿って作られた区域のことである。

住民によると右足と左足で、この区域の線引きの上に立つことができるそうである。

地震発生後、日常生活の何もかもが動かなくなっていた。

福島県介護福祉士会は、一般社団法人化のため、翌日の12日に臨時理事会を開く予定だった。4月24日（日）の定期総会で会員の承認をもらう、まさに新たなスタートの前日に大震災は発生した。

総会予定当日、初めての理事会を開くことになった。

6方部全てから理事の参加を得ることが出来、総会に向けて歩き出すことができた。

震災後の方部報告で、Aさんの活動状況が明らかになった。実際の活動現場を見ておきたいと思いたったのが、訪問のきっかけである。

Aさんは、3月の中旬、政府が示した屋内退避区域から、緊急時避難準備区域に指示内容が変更された区域で活動している、介護福祉士である。

この記録は4月25日、5月14日の2回、上記の指定区域で活動する介護福祉士を訪ね、現状を聞き取りまとめたものである

## 1 回目の訪問

4月25日、Aさんの勤務する特別養護老人ホーム併設のヘルパーステーションを訪ねた。



警戒区域には交通を遮断するバリケードが張られ、防護服を来た人の送迎バスや、パトカー、自衛隊の車輛が警告灯を点滅し、走っているだけである。異様な息苦しさを感じた。

M市の建物や主要道路は以前来た時と、なんら変わりなかった。しかし戒厳令が布かれた町のように、人の姿も市内を歩きかう車もなかった。



### Aさんの話より

3月11日、通常の勤務をしていたAさんはヘルパーステーションの事務所にいたところ、大震災に見舞われた。その事務所は法人の特別養護老人ホーム、ケアハウスに隣接していた。2施設の入居者110名及び介護職員多数が勤務中被災した。電気の供給が停止したが、地震の被害はそれでは終わらなかった。津波がもたらした福島第一原子力発電所の事故が発生し、苦悩の日々がはじまったのである。寒さに耐え、食料も日を追う毎に減ってくる状況で救援を待つ日々が続いた。

ここが福島県でなければ、施設のライフライン復旧だけを辛抱強く待てばよかった。原発事故さえなければ、この施設はまだ動いていたはずである。地震による施設の建物に損壊はなく、誰一人ここから出て行く理由はなかった。しかし、原発事故は非情にも、この安住の地から離れざるを得ない状況を作った。良く考えれば避難であるが、なぜ追い出されるのかと思う利用者には納得がいくはずはない。次第に原発の恐怖は、元気な介護職員も避難せざるを得ない窮地に追い込んでいった。介護職員の数は日増しに減っていき、Aさんは施設に泊り込み、入居者の介護を行っていたという。

不眠、不休の介護が続いた。

大地震発生時から、福島県介護福祉士会事務局には相双方部の理事から救援依頼があった。「介護者が足りません。助けに来てください。今、介護している職員が倒れてしまいます」という内容だった。

原発の屋内退避区域の介護職不足に、果たしてどんな打つ手があったのだろうか。

被災県の介護福祉士は、他の施設や地域に出向くことは不可能だった。  
自施設の利用者への介護に加え、原発地域や地震・津波からの避難者を、ベッドがある限り、受け入れていたからだ。

「身体こわさないように頑張っ！」としか言えない自分がいた。

そんな中、原発の影響も省みず、介護福祉士の仲間が隣町から応援に駆けつけ手伝ってくれたそうだ。本当に助かった。まだその御礼も言っていない。あの恩は一生忘れられないと涙ながらに語っていた。人の出来ないことをする勇気を称えていた。

施設入居者100名を超える避難先を探していたとき、首都圏の老人保健施設から受け入れをしてくださるという話があり、避難が決定した。

地震発生から1週間以上が経っていた。迎えに来たバスには、受け入れ先の老健の職員が乗ってきていた。乗れるだけの利用者がバスに乗りこむこととなり、顔なじみの一人ひとりの利用者と、話す時間もなく別れることになった。

リクライニング車いす利用者が、足をまげて座席に座る状況もあった。

「痛い」と訴えていたがどうする事も出来なかったと話す。

「どこに行くんだ？」と聞く利用者に「ここは寒いし、食事も出来ないから暖かいところへ行くんですよ」と説明した。1泊2日の旅行に行く感覚で送り出した。

こんなに長引くことになろうとは考えていなかった。

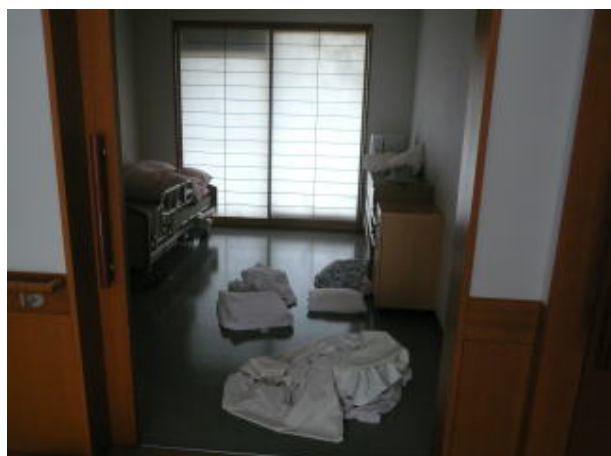
利用者は首都圏の各施設に振り分けられ、生活の安定を得たが、一人ひとりの状態や要望は聞いていただく余裕もなく、また受け付けられない状況だった。

その後、利用者がどのような生活をしているか知る事はできなかった。

利用者がいなくなった施設内は、その生活が今まであった状態で放置された。

全ての入居者の避難が終わり、がらんとした施設を片付けながら、Aさんはなにが起きたのか理解できず、また納得がいかず涙だけが溢れたという。

私は施設内を見せていただいた。  
真新しい清潔な施設内を歩いていると、その日の生活がそっくり残されており、柱の陰から介護職員がずっと姿を現すような錯覚に囚われた。





利用者が車いすを自走し、笑顔で廊下を  
行く姿が浮かんだ。持参できるものは限  
られているため、利用者の衣類はあちこ  
ちにそのまま残されていた。

生活の温もりまで感じられるのに、全く人気のない介護施設を見るのは初めてだった。

生活者が不在となったこの施設で、1日前まであった仕事がなくなっていた。  
仕事を失った介護職員には、家族とともに避難する職員や、引き続き法人の雇用により待機  
状態となる職員など、同じ職場の同僚だった職員は自分の意思とは関係なく職場を離れてい  
ったという。たった一日で、すべての人々の生活は一変した。

特養の片付けに追われ、ふっと我に返ったAさんはヘルパーステーションの利用者が気にな  
った。

もう避難して家にはいないだろうと思っていたが、利用者の自宅を巡り安否確認をはじめた。  
門扉が閉まっているのを確認し、ポストに封筒を入れていると、声がした。

「もう見捨てられたかと思っていたよ」と利用者の声だった。

大震災から無我夢中の時間が経過していた。ここに顔馴染みの利用者がいたことに驚愕した。

「忘れるはずじゃないじゃない」と抱き合って泣いた。

在宅には、まだ避難も出来ない利用者が、支援を待っている事実を突きつけられた。

介護職員が次々と施設を去り、法人の理事長に施設や事業所を閉鎖するといわれた。

しかし、Aさんはヘルパー利用者を見捨てる事が出来なかった。ヘルパーステーションの鍵  
を預かり、一人でボランティア活動をはじめた。

「なぜ出て行かないのか？」の質問にはこう答えてくれた。

「自分をここまで育ててくれた法人に対し、自分のできる事で恩返しをしたかった。」

「何よりも利用者がそこにいるのに、自分だけ出て行くことは出来ない」

留まる力を利用者がくれたと話す。とにかく生活が不自由な利用者が自宅にいる事実があっ  
た。

ヘルパーの仕事ほどやりがいのある仕事はないとAさんは語る。サービス提供責任者とし  
てデスクワークが増えていた状態であったが、このような事態で今、現場に出られることに  
感謝していると言った。幸い登録ヘルパーが3名戻っており、現在4名で対応出来ると言っ

た時、はじめて笑顔が見られた。

法人の本部が遠方に避難しているため、事業所としての運営にも支障がでている。ケアマネージャーも退避していない、提供表もない介護のため、ボランティアでの仕事は続いていた。訪問の日が重なるにつれ更なる問題が起きてきた。利用者は今までのように料金を請求されないため、遠慮勝ちになり申し訳ないから来なくてもいいよと言うようになってしまった。

利用者の心の負担を考えると胸が痛んだと苦しい胸のうちを明かす。

施設入居者は、誰の目にも介護を受ける人として明確である。

在宅は自分が意思表示をしない限り忘れられる存在である。

また緊急時に、自力での避難が困難な人たちである。

この区域を車で移動していると、パトカーや自衛隊の職務質問に合う。「仕事しています」と答えると意外な顔をされる。「なぜ逃げないのか」と不思議がられるという。

友人や離れている家族には「いつまでも何してるの？早く帰ってきて」と言われ続けている。

一旦戻ったら決して帰してはもらえないだろう。もうこの仕事をする事はできない。

放射能や余震の怖さがあってもこの仕事は続ける。と笑顔のAさんであった。

テレビ局の取材で「この仕事をやめるのはどんな時ですか？」と聞かれた。

「利用者が安心で安全なところへ、自分の意思で決めてここを出て行ったときには辞める」と答えたそうだ。

一方では今後、この緊急避難準備区域は屋内退避が解かれたため、避難所での生活に限界を感じる人々が戻ってくると思われる。

今後、この事業所が再開し介護保険の請求が出来る状態になったら、ヘルパーステーションを再開し利用者には心配しないで利用してほしい。

そうなると介護職員が相当数必要になってくる。

しかし、原発の不安のある地域に果たして介護者は戻るだろうか。また新たな介護者を雇う事は出来るだろうか。介護が必要な人がいる限り介護者は必要である。

話の成り行きから、「有償のボランティアを国に雇ってもらったらどうか」といった意見も出たほどである。

しかし、現在Aさんが訪問している利用者は本来ここにはいないはずの住人であり、行政も在宅生活者の正確な人数を把握していない状況がある。

国や県に要介護者の救援を依頼すると、困るのは利用者だとAさんは言う。

避難しないで自宅にいる。これが表面化することで強制退避になりはしないか・・・。

「利用者が望むことを支援するのが私の役目である。」とAさんは言い切った。

ヘルパー利用者が増えて介護保険の請求が出来た時点で、当法人は施設職員を在宅で採用しても良いとっている。しかし、原発の脅威で避難した職員と、残って活動している職員、どちらにも何らかの思いが残り、事業が再開してもその溝を埋める事は難しいようだ。

果たして、今までと同じように普通に付き合えるか自信がないとAさんは語った。

避難したことによって、自分を責めて苦しんでいる介護職員もいるようだ。  
また、自身の大きな被災によって、仕事の事を考えられない専門職も出てくるだろう。  
介護職員のそれぞれの熱かった思いが、萎えていきはしないか…。  
本当に…こんなはずではなかったのである。

原発地域では、テレビや新聞の報道では見えてこない人々の暮らしへの切実な思いが煮詰まっている。膨れ上がった思いが、いつ爆発しても不思議ではない。  
それを留まらせているのは東北人の辛抱強さである。  
福島は春が似合う所である。施設の周りで満開の桜を、本当に心から愛でる日は来るのだろうか顔曇らせたAさんであった。

## 2 回目の訪問

5月14日

5月の大型連休が終わり、日常生活が始まった。

Aさんには、相変わらずヘルパーとしての日々が続いていた。  
私は、Aさんに1回目の報告書を手渡したい思いがあった。同じヘルパーステーションでまた会うことができた。

M市は、大型連休が終わると急激に人が増えだしたという。  
前回の訪問では車がなかった街中で、今回は信号待ちをする車の列が出来ていた。  
Aさんは震災後もずっと同じ町に住み、見慣れた風景が短期間で変わりゆく状況を見続けている。人々がいなくなったのも辛かったが、不安を抱えてのふるさとへの帰還には複雑な思いがすると話す。

しかし、「避難所という特殊な空間に生活することを強いられる」という現実を自宅に暮らす私達には理解等できないと思われる。

避難所で高齢の親を介護している人は、居場所がなくなっている状況もあるそうだ。  
親が一人で出かけてしまい捜し歩く事もあり、介護の限界を感じ自宅に帰らざるを得なくなるとのことだ。介護を必要とする人は、はじめに行政に相談する。

行政の窓口も多忙を極めているため、戻った人の介護依頼をしてくる住民にはこんな言葉が返されるようだ。「なぜ、戻ってきたのですか？」

この区域には、介護を提供できる事業所がないため、残って活動しているAさんの事業所に相談するように言われたと尋ねてくる人が多いと言う。

Aさんの苦悩は、以前にも増して深くなっている。

介護は続けたいが、介護保険の要である居宅支援事業所が動いていないからである。  
ケアマネジャーの避難が続き、ケアプランを立てることが出来ない状況がある。  
新たに戻り介護保険を利用したい人も、元々利用していた人も、使えない制度に苛立ちが募っている。「本当は頼って欲しい」しかし人材不足や制度の縛りで身動きがとれないのだ。  
日常生活動作が不自由な高齢者は、介護が停滞した地域ではサービスの利用もできず、身体を動かさない日々が続いている。放射能汚染の影響で自宅にこもる生活のため、ますます

す筋力は低下している状態である。

このままの状態が続けば、介護度の見直しをする必要のある利用者が増えるのは必至である。

M市では、一旦閉鎖した大型ショッピングセンターが、5月初旬には再開し、物資は以前のように揃うようになっている。

様々な理由で戻ってくる人たちは、避難以前の生活に戻ってくるのではない。

緊急時には自力での避難が求められる事や、入院できる医療機関はないことなど十分に理解しているのだろうか、Aさんは表情をゆがめた。

自分の長年住んでいた自宅に戻るのに、こんなに招かれざる状況を持った人々のいる事を誰が理解できるだろう。

自分の家が、地震と津波から損壊の危機を免れていた。本来ならありがたく感謝するところである。目に見えない放射能によって、自分の判断ではない基準(?)に縛られているのが、緊急時避難準備区域の持つ苦しさだ。

緊急時とはどんな時期なのか、自力避難が自分で可能なのか。

Aさんは、良くも悪くもその決断には「覚悟」が必要だと言った。

最後のAさんの言葉に、せめてもの光が射したことを伝えたい。

震災直後の最大の混乱期には、「どうして?」「なんでこんなことに?」という思いや言葉で頭がいっぱいだった。

今は、「なんで」が消えて「どうしようか…。」「どうすれば?」「どうしていく?」

方向を見定めて、自分で探していくしかないと思い始めている。

「自分の気持ちが前向きになっている事を感じる。」とのことだった。

文明国日本にこんな現実があること(あったことを)を、私達はしっかりと記憶しておくなければならない。

私は介護福祉士として、「そこに介護を必要なひとがいる限りそこで介護をする」と言い切るAさんの存在を記憶に留め、話し告ぐことを誓った。

介護福祉士の介護の原点は、「利用者の心身の状況に応じた介護」と定義されている。

こんなに的確に、Aさんの介護福祉士としての業務姿勢を表している言葉はないのではないか。このような震災が東北を襲い、そこに取り残される高齢者がいることを見通した人が、本文を考えたとしか思えない。

M市の要介護者への介護は“心身の状況に応じた”究極の介護ではないか。

一人の介護福祉士が、人として取った当たり前の行動が、何故こんなに特殊な勇気ある行動として、私に写ってしまったのだろうか。

私達は、介護を職業とする心温かい人間である。

また、“生きたい”と痛切に願う、当り前の欲求をもつ人間でもある。

千年に一度というこの大地震は、多くの人々に自分でも知らない自分の心の中を見せてくれたはずだ。この貴重な体験から、初めて芽吹いていることに気づいた心の“新芽“を、自身の力で育てていく責務があるように思えてならない。

私はずっと、今の自分の気持ちを表現する言葉が見つからず、涙になってしまうのが日課になっていた。ある日、雑誌「いきいき」が届いた。

「この寄辺のなさから、脱却するために」という高村薫さんの文章があった。私が捜し求めていた言葉が「寄辺のなさ」だったとその時気づいた。

「未来が見えてくる社会にならなければ、それは、復興したことにはならない」と高村さんは言った。

私達が、愛してやまない未来の福島が、どんな場所になっていくのか、みつめ続けていきたいと思う。